

# 追 憶

— 長崎医科大学原子爆弾犠牲者の靈に捧ぐ —

## 沿革略記

### ——長崎医科大学——

長崎医科大学は大正十二年四月一日長崎医学専門学校の組織を變更して、開設された官立医科大学六校の一つである。その起源は遠く安政四年（一八五七年）十一月十二日開設された幕府の医学伝習所（今の市内大村町）で、オランダ国軍医ポンペ（J. L. C. Pompe Van Meerdervoort）が幕府の医官松本良順等十一名の学徒に医学の講義を開始したのがその濫觴であつて、これ実に我国医学校の嚆矢として近世文化史上特に重要視されるべきものである。万延元年（一八六〇年）幕府はポンペの建言をいれ、小島郷字稻荷岳に、郷民の救恤診療を行う病院として養生所を建てることを決定、翌文久元年完成した。この養生所には薬局を置き、また図書館並びに人体解剖室を設け、臨床医学の講義も行われた。慶応元年、時の長崎奉行は養生所を精得館と改称し更に化学教室を完備した。

明治元年、時に判事であつた井上聞多（侯爵馨）が同館を視察し、政府に精得館の状況を報告、更に整備すべき旨を建議した、よつて政府は精得館を長崎府医学校と改称、長与専齋が校長となつた。同三年、大学所轄となり、翌四年文部省所管となり校名も長崎医学校と改めた。同七年征蕃の事おこり同校廃止、蕃地事務局病院となる。翌八年病院設備は県所轄となり長崎病院が開設された。明治九年同病院内に医学場を開設、その後明治十一年長崎医学校と改称、更に明治十二年に県立となつたが、同十六年長崎県立甲種医学校と改称、更に明治二十年勅令により地方税による校費の支弁が打切られたため、同校も二十一年三月限りで終りを告げることとなつた。そこで政府は二十年八月第五高等中学校医学部を長崎に置くこととした。すなわち明治二十一年三月、時の長崎甲種医学校長吉田健康を医学部長に任じ、九月第一回入学式を行った。明治二十三年六月薬学科を附設した。明治二十四年九月、現在の医学部の地（旧浦上山里村里郷）に校舎を新築し、同二十七年九月第五高等学校医学部と改称した。明治三十四年長崎医学専門学校と改称、同年六月田代正が初代校長に任ぜられた。

大正十二年三月三十一日長崎医学専門学校は廃止となり、四月一日長崎医科大学が開設され、山田基が初代学長に任ぜられた。

大正十四年より附属医院の鉄筋コンクリート病棟の新築に入る。昭和二年三月第一回卒業生十九名を世に送る。同十四年臨時附属医学専門部を新に置く。同十六年東亜風土病研究所が創設、大学に附属された。同二十年八月九日原子爆弾投下さる。直ちに長崎市新興善小学校舎を仮收容所としたが、九月大学再興を議決し、十月大村市の元海軍病院において講義を開始し同二十一年諫早海軍病院跡に転ず。附属医専廃校、長崎特設高等学校を置く。昭和二十二年附属医院外来本館の補修を開始し、基礎医学教室復帰し同年十一月復帰式を挙行し、事務部復帰す。

昭和二十四年新制長崎大学に包括さる。同二十五年臨床各科新興善より復帰す。同二十八年基礎医学教室校舎第一棟一部竣工し、管理部復帰、生理学教室入室す。同二十九年三月最後の旧制医科大学卒業式を挙行す。



## 慰 靈 碑

昭和二十二年十一月十二日長崎医科大学記念日に当り職員、学生、有志一同の献金により旧陸会會議室跡に建立さる。

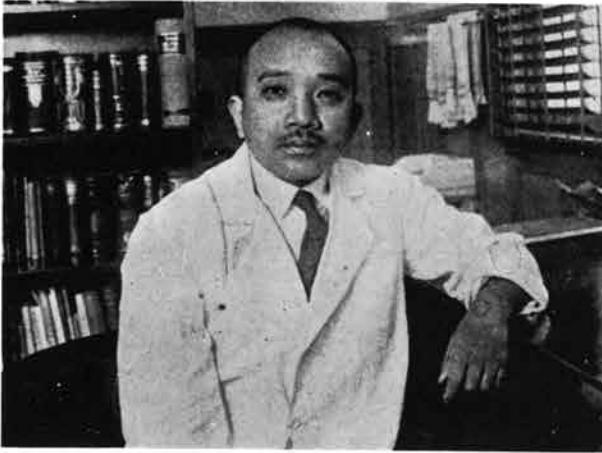
尙資材として用いられたのは大講堂玄関(向つて右)の花崗岩の柱である。



故 角 尾 学 長



故 池 田 教 授 (解剖学第一教室)



故 高 木 教 授 (解剖学第二教室)



故 清 原 教 授 (生理学教室)



故 内 野 教 授 (生化学教室)



故 内藤(達)教授(細菌学教室)



故 祖 父 江 教 授 (薬理学教室)



故 金子 教授 (風土病研究所)



故 大 倉 教 授 (衛 生 学 教 室)



故 梅 田 教 授 (病 理 学 第 二 教 室)





故 竹内 教授 (病理学第一教室)



故 国房 教授 (法医学教室)



故 山根 教授 (眼科学教室)



故 永井 助 教授  
(物療教室)



故 内藤(勝)教授 (産婦人科教室)

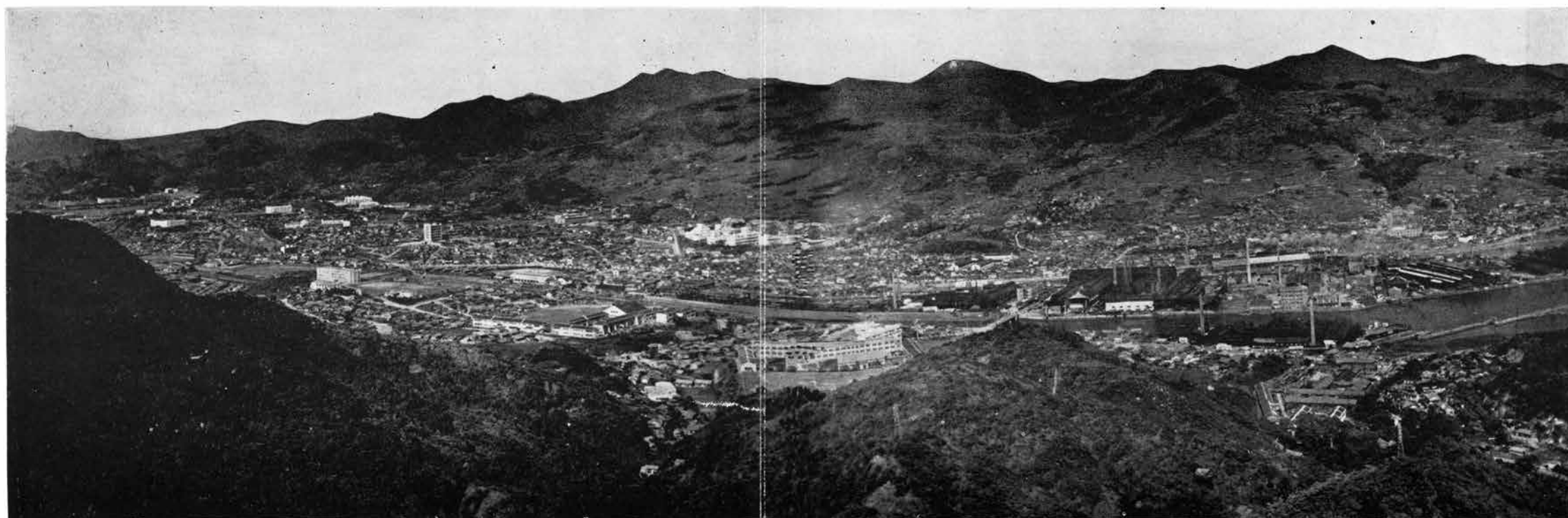


故 山 木 事 務 官

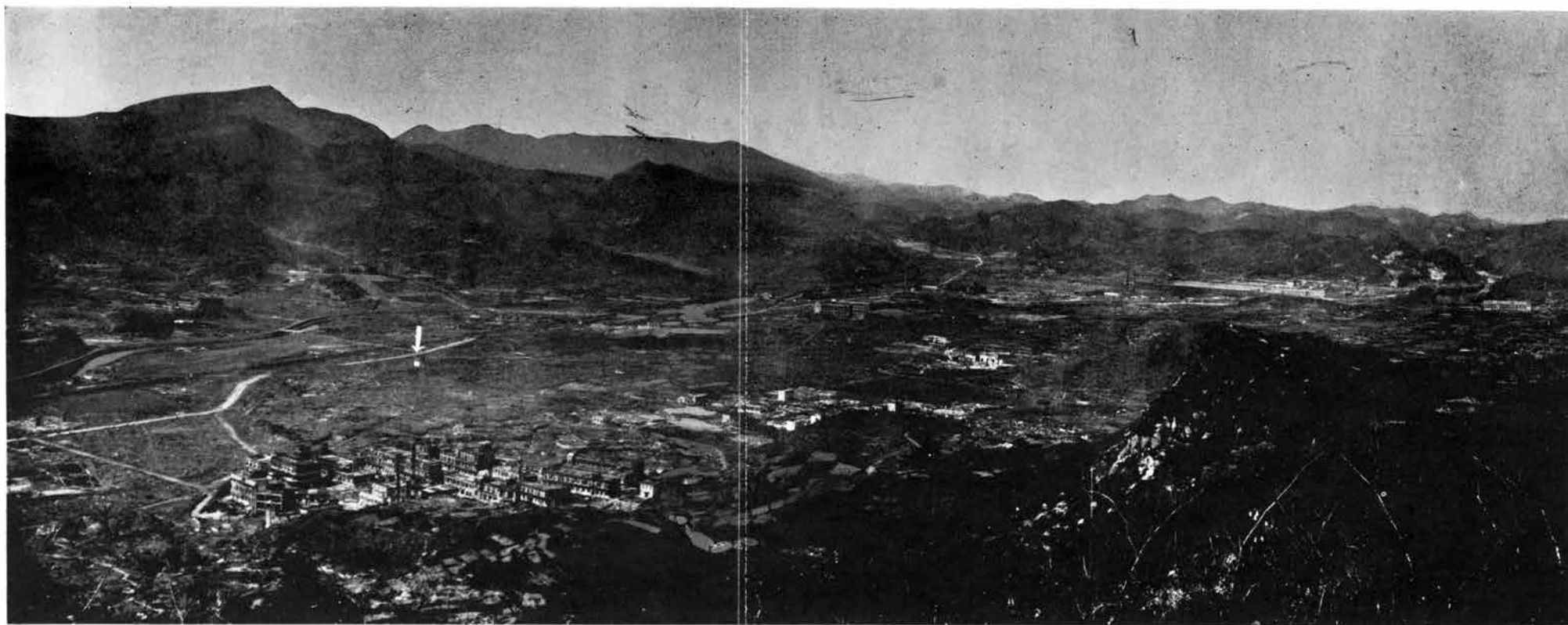


被爆直後稲佐山より旧長崎医科大学及び爆心地(↓印)を望む

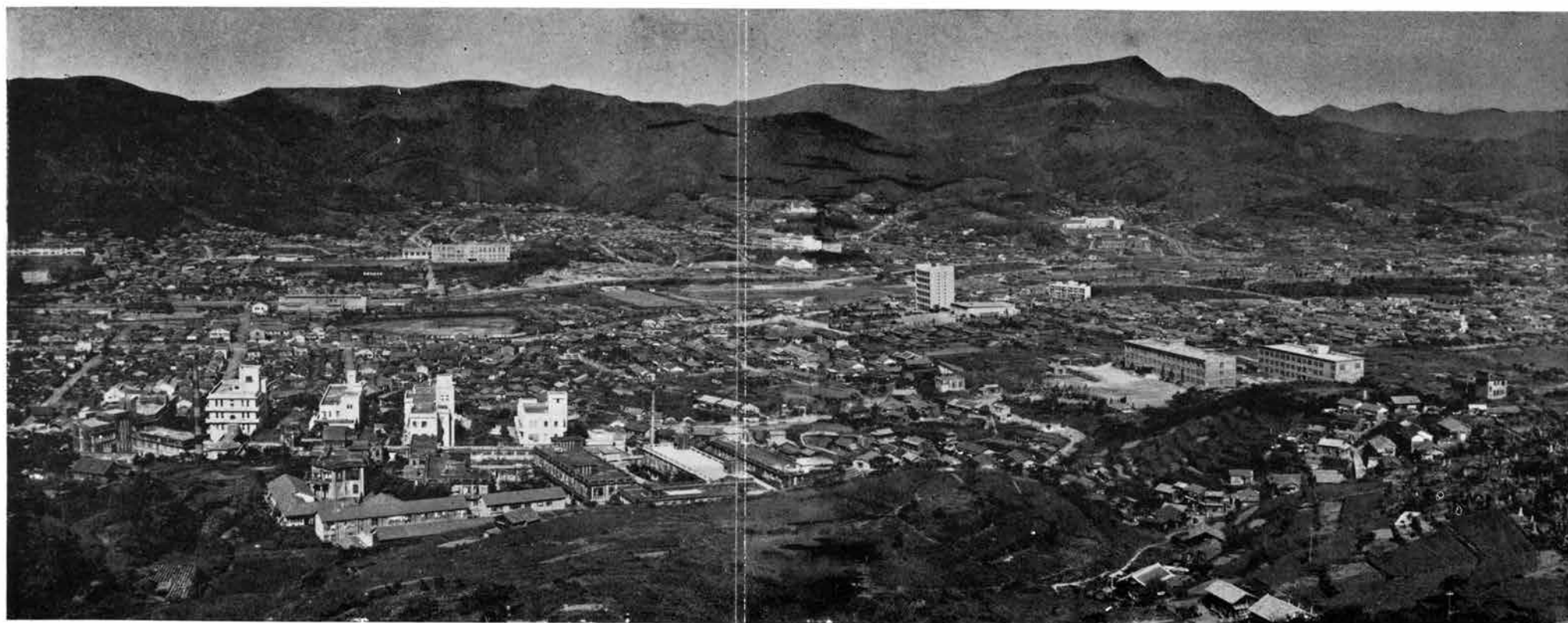
(朝日新聞社提供)



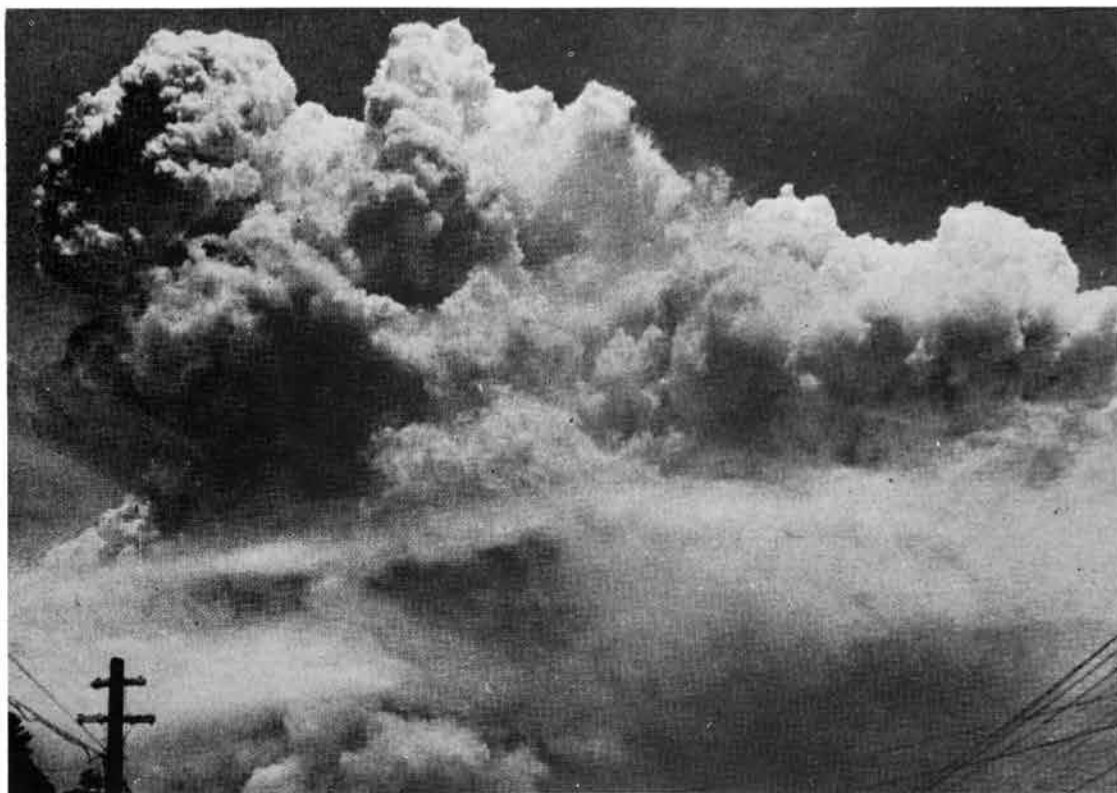
稲佐山より長崎大学医学部及び爆心地を望む(昭和30年)



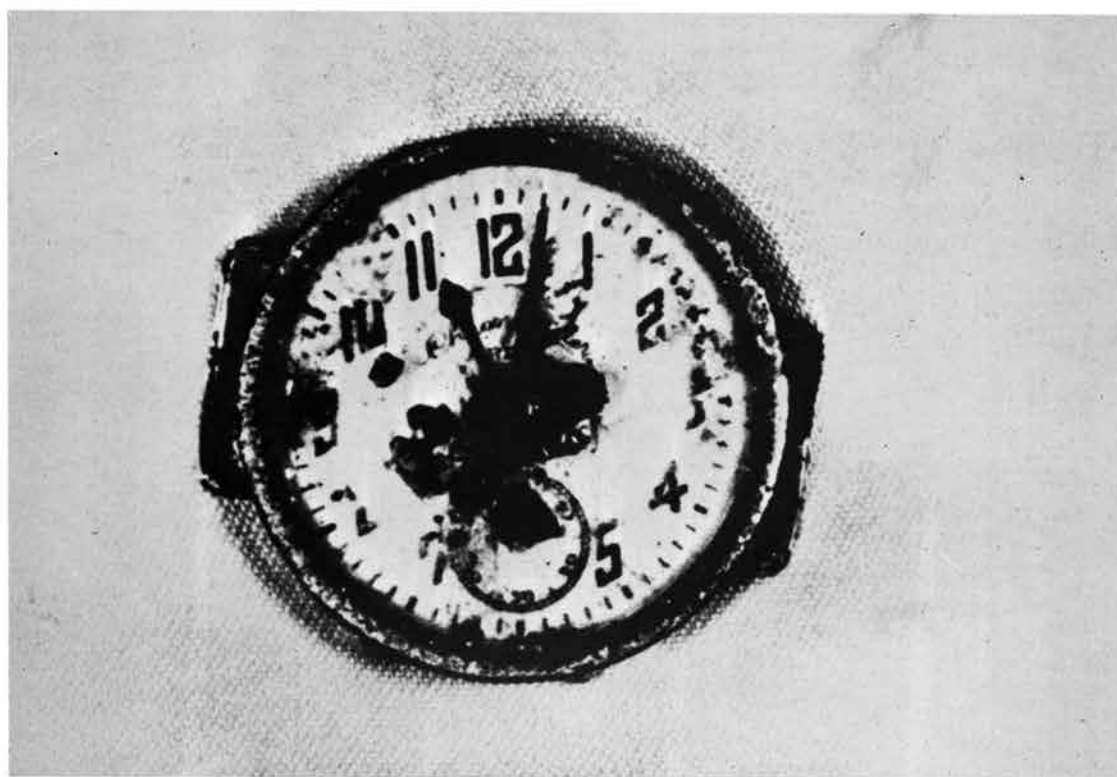
被爆直後の長崎医科大学全景（穴弘法山より）



復興途上の長崎大学医学部全景（穴弘法山より、昭和30年）



長崎の原子雲



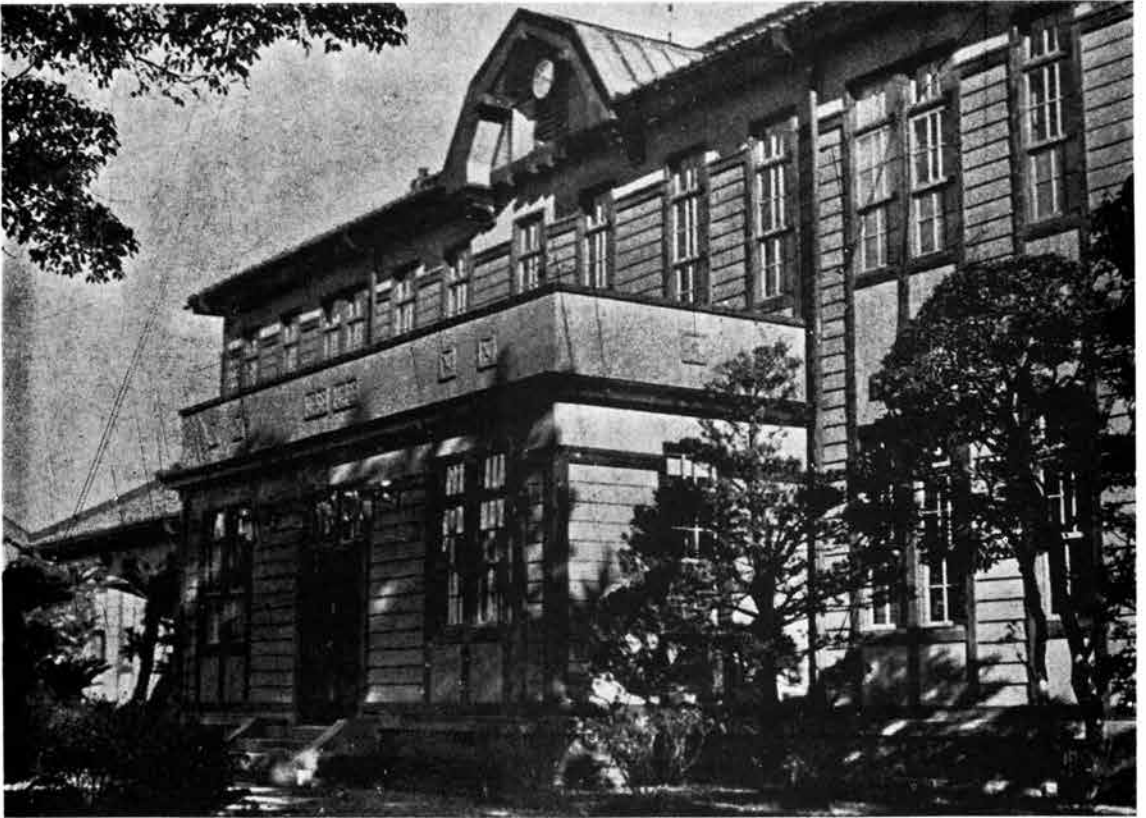
投下11時2分を示す時計（東松照明氏写）



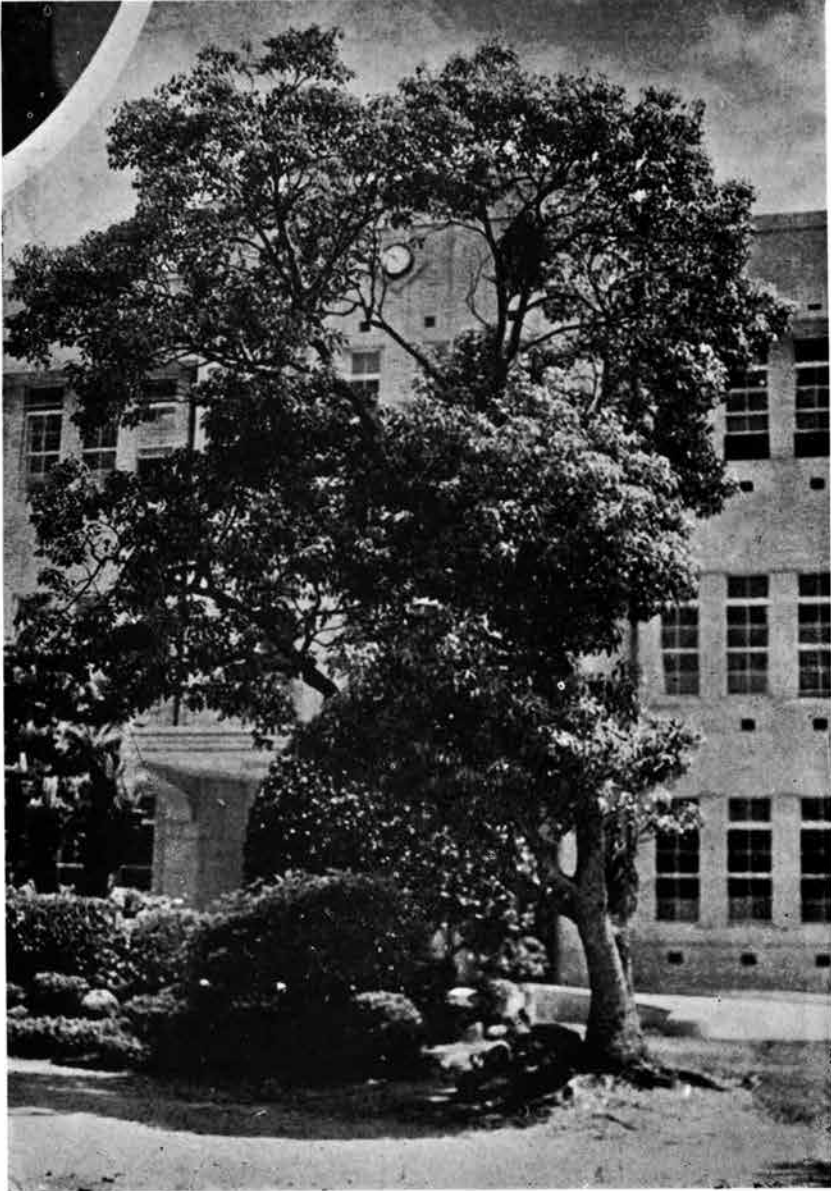
旧長崎医科大学本館正面



病院に登る石畳（大学坂）原爆の前



旧長崎医科大学本館

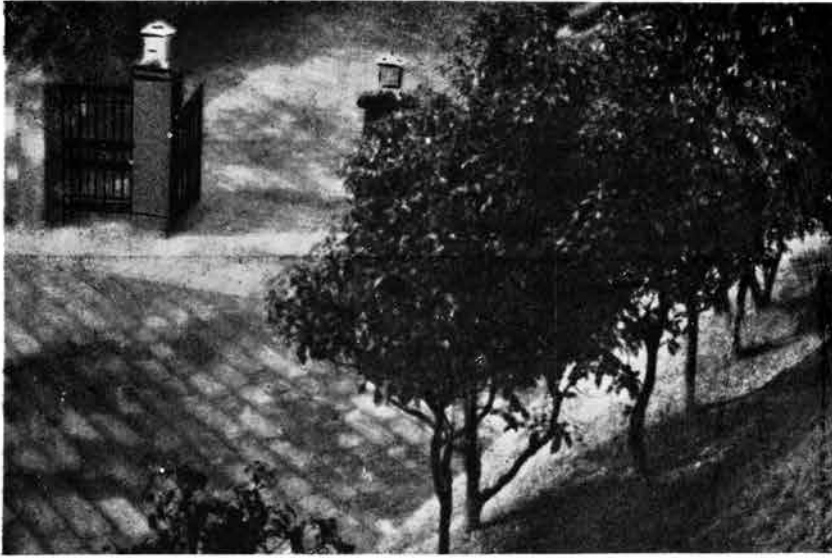


旧長崎医科大学附属医院





旧長崎医科大学大講堂



旧長崎医科大学正門



旧長崎医科大学附属医院玄関



旧長崎医科大学グラウンド及び旧浦上天主堂



被爆直後の長崎医科大学附属病院



被爆直後の長崎医科大学附属医院



被爆直後の長崎医科大学グラウンド及び基礎医学教室

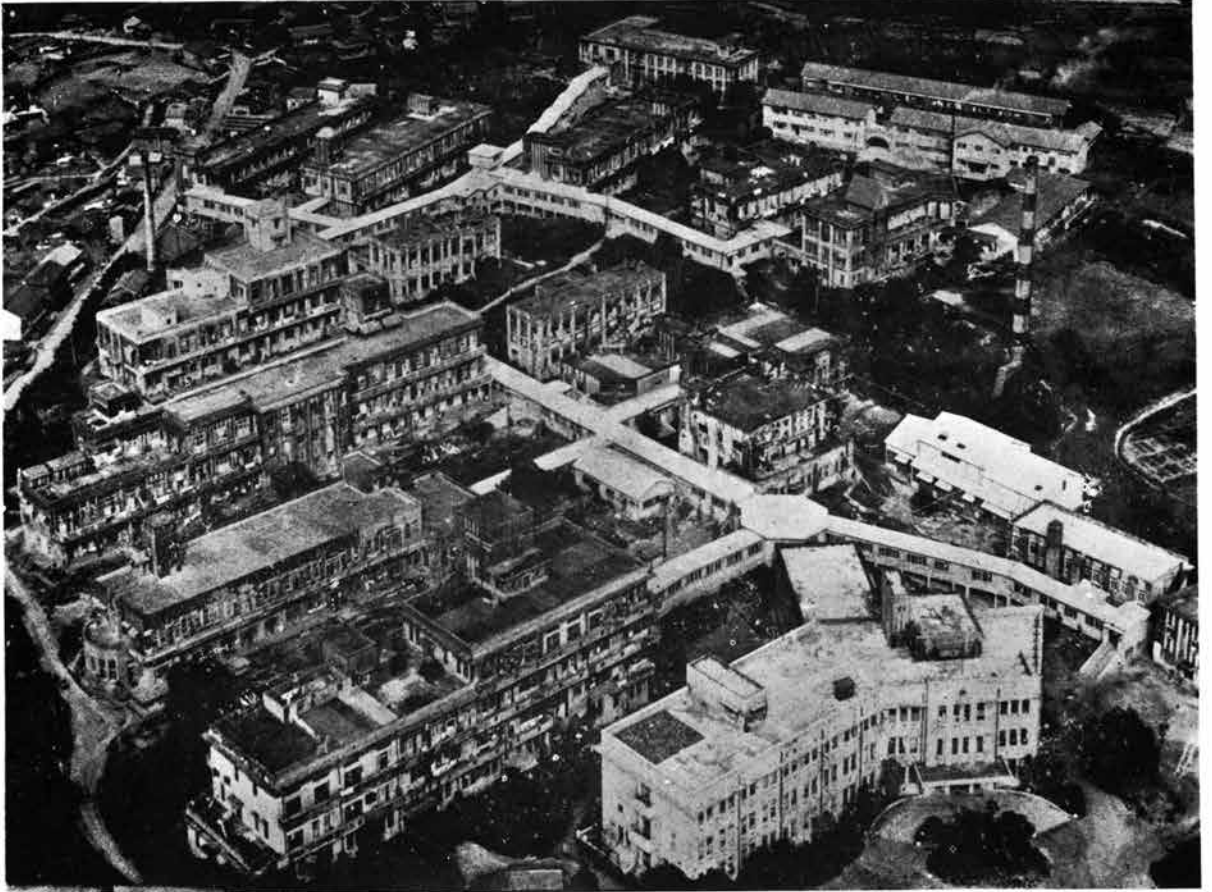


新興善小学校に於ける被災者の治療状況



同

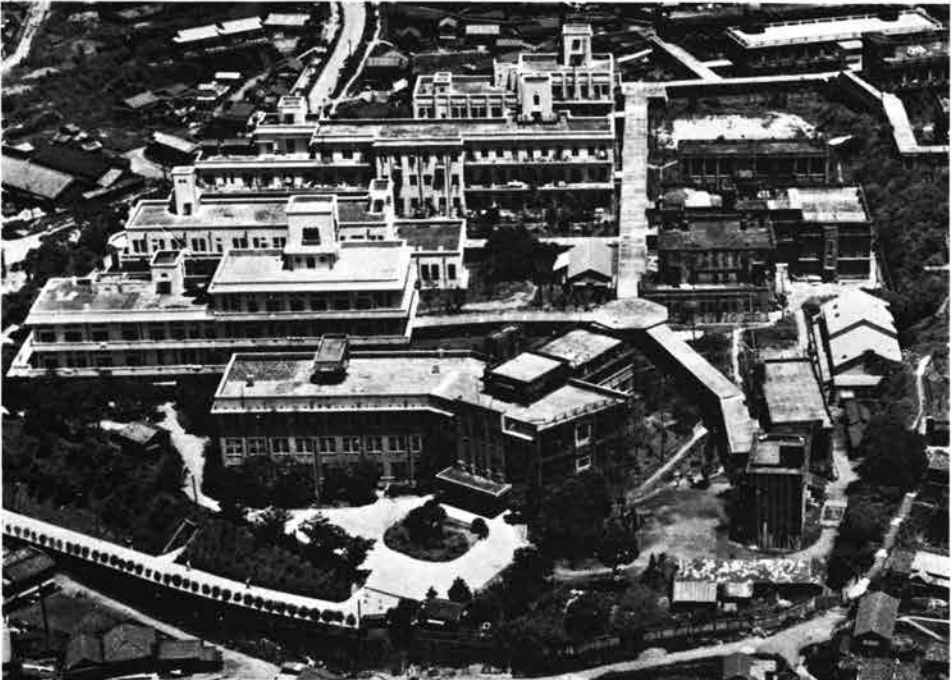
上



復興途上の長崎大学医学部附属病院全景（昭和28年）



復興途上の長崎大学医学部附属病院

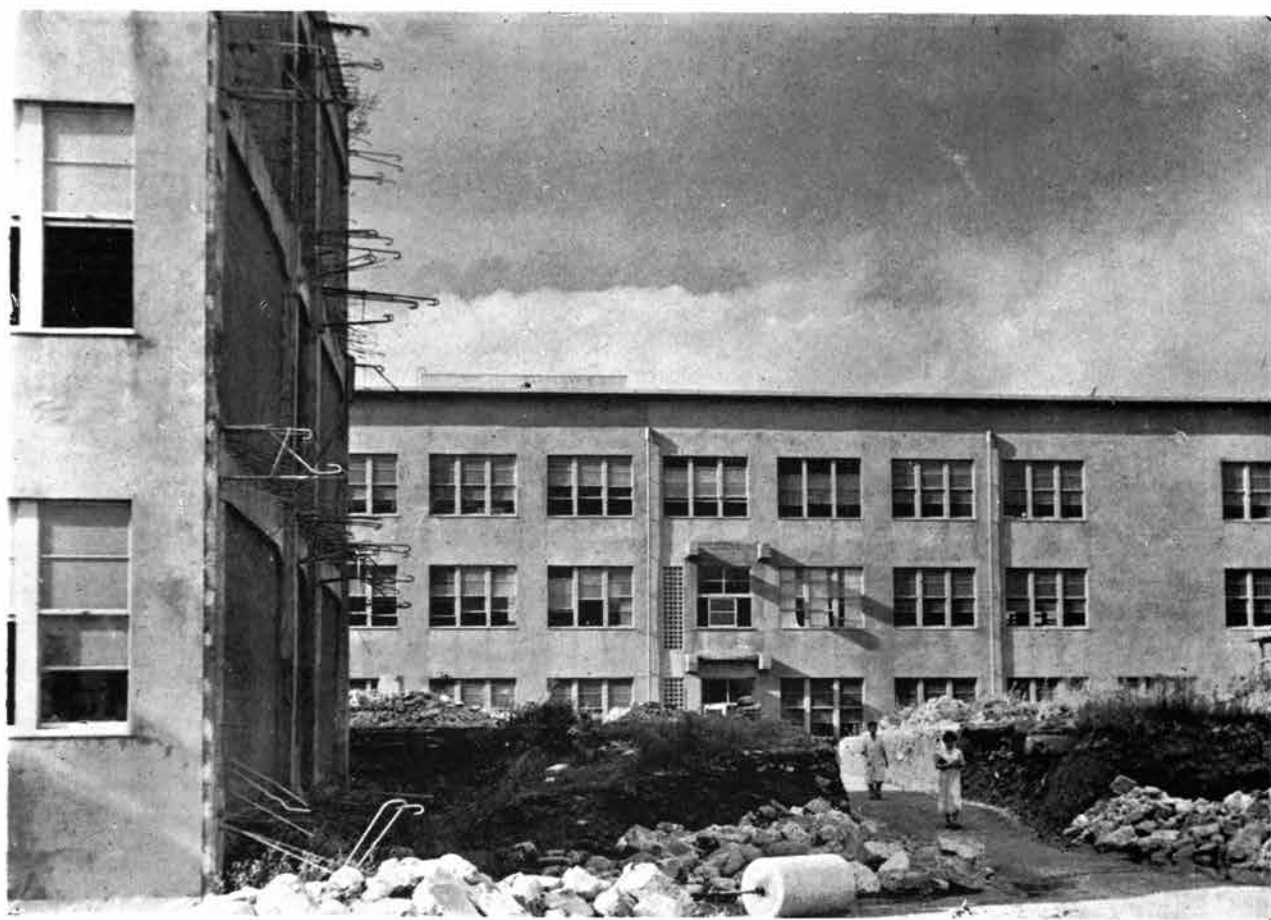


同上（毎日新聞社提供、昭和30年）

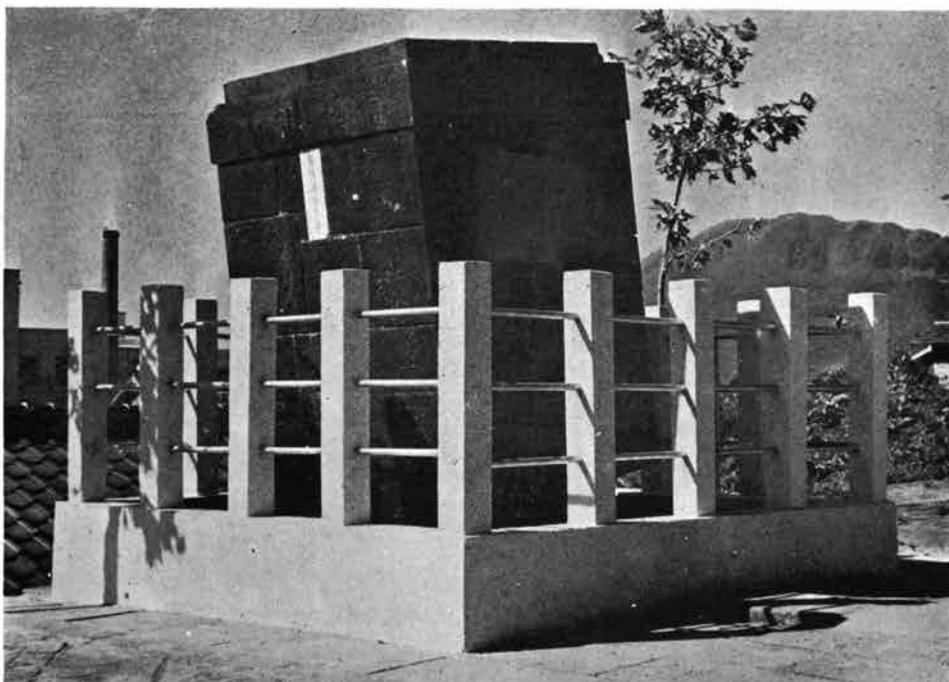




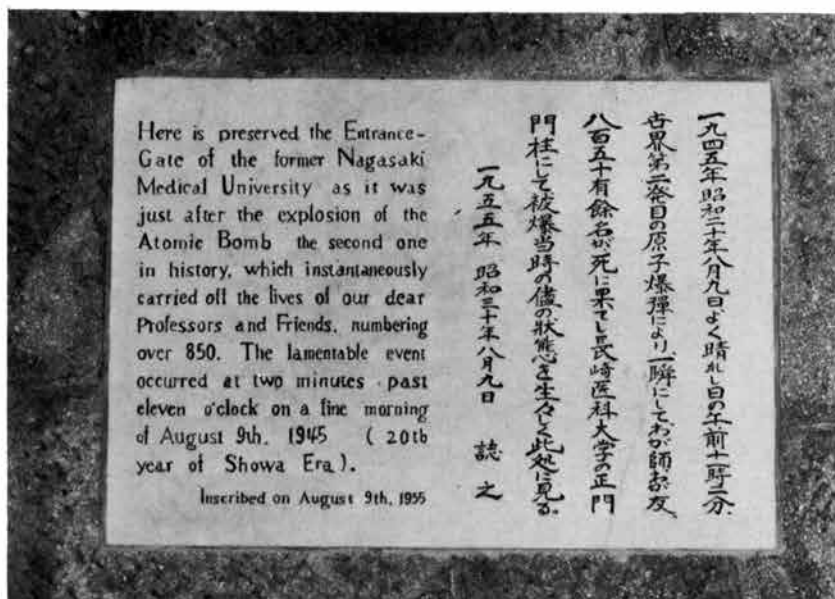
復興途上の長崎大学医学部基礎教室（昭和30年）



復興途上の長崎大学医学部基礎教室(昭和30年)



旧長崎医科大学正門（向つて左、昭和30年）



Here is preserved the Entrance-Gate of the former Nagasaki Medical University as it was just after the explosion of the Atomic Bomb the second one in history, which instantaneously carried off the lives of our dear Professors and Friends, numbering over 850. The lamentable event occurred at two minutes past eleven o'clock on a fine morning of August 9th, 1945 (20th year of Showa Era).

Inscribed on August 9th, 1955

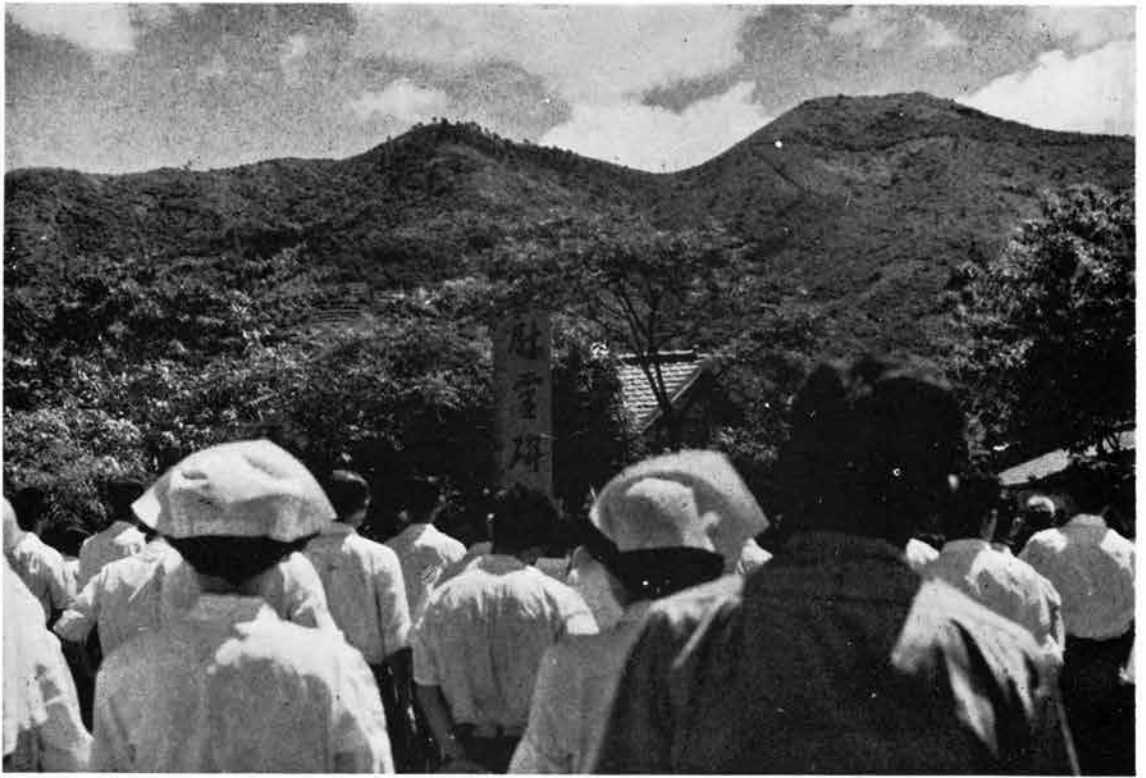
一九四五年昭和三十八年八月九日正午前十時二分  
 吾界第二番目の原子爆弾より一瞬にしてこの師お友  
 八百五十有餘名の死に果し長崎医科大学の正門  
 門柱に之被爆當時の儘の状態を保存し此処に見る  
 一九五五年 昭和三十八年八月九日 誌之

同上 門柱碑文

被爆十年



旧長崎医科大学基礎教室跡に祈る遺族



原爆十周年記念式（昭和30年8月9日）



### 慰靈碑納骨所蓋板

現在、蓋板の下に重ねてある砂岩（横九〇釐、縦三四釐、厚四・五釐）には「友此処に眠る」と横書に刻してある。被爆後、大学講内にあつた遺体は家族、友人等によつて殆ど処理されたが、一月半後の九月下旬まで残存散在していた遺体は、復員直後の山本繁一郎・吉本博一・米村博臣・張欽南・富崎十美夫・浜里欣一郎の六氏（いづれも昭和二十年、附医卒）が十一月初までかゝつて処理、且つ協力して墳墓を営み、残余の遺骨は墳墓の前に備えた水槽に収めることとし、大講堂前の敷石に前記六字を鉄棒と石とを以て刻し、それを墳墓の上に置いて墓標に代えた。その後、七周忌に当り、墳墓は水槽内の遺骨と共に慰靈碑に合葬された。

なお、上掲の蓋板には慰靈碑建設後間もなく永井隆氏が銅板を鑄造、嵌入されたが、何時の間にか持ち去られて今はない。